HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	第四章　東北帝国大学農科大学（一九〇七～一九一八）
Citation	北大百年史, 通説, 165-207
Issue Date	1982-07-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/30015
Type	departmental bulletin paper
File Information	tsusetu_p165-207.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

第四章　東北帝国大学農科大学（一九〇七～一九一八）

本章では、一九〇七年（明治四〇）から、一九一八年（大正七）におよぶ東北帝国大学農科大学の時期を扱う。

札幌農学校の大学昇格運動は、一九〇〇年前後から活発になり、ついに東北帝大・九州帝大の設立とともに、一分科大学という形ではあったが実を結んだわけである。一般的に見れば、中等教育・実業教育の発展の上に、大学増設の機運が生じたことが幸いした。一方農学校の側から見れば、地元道民・区民の強い支援はもとより、そのまま大学に移行させることができるほどの学校の水準を維持してきた先人の労苦が酬いられたというべきだろう。

農科大学は学科を増設し、また学科課程を細分してのちの六学科制の基礎をつくり、また選択制をとり入れるなど内容の充実をはかった。講座数もこの間に倍以上に増加した。こうして、のちの北大農学部の基本的な骨格が形成されるとともに、やがて一九一八年北海道帝国大学として独立するための基礎を準備した時期として、この時期は大きな意味をもっていた。

東北帝国大学の分科大学から、独立した帝国大学に発展させたいという希望は、この時期のはじめから存在した。この時期に行われた大学独立、新分科大学設置の運動については次章でふれる。

以下、第一節で大学設置運動を、第二節で農科大学の概要とその運営を、第三節で学生生徒の状況とその生活について述べることにする。

第一節　大学設置運動

表4－1　中学校の増加と高等学校進学状況

	1895	1900	1905
中学校数	87	194	259
中学校卒業生数	1,595	7,787	14,454
高等学校入学志願者数	1,524	4,914	4,738
高等学校入学者数	1,013	2,095	1,482

備考　『文部省年報』より作成。中学校数に分校は含まない。人数に外国人は含まない。

帝国大学増設の動き

日清戦争の終結後日本における中等教育機関の整備は急速に進み、一八九九年（明治三二）にあいついで公布された中学校令（改正）、実業学校令、高等女学校令により、戦前期における中等学校制度の骨格は確立されたと言われている。

中学校数は一八九五年から一九〇五年までの一〇年間にほぼ三倍となり、中学卒業生中高等学校への入学志願者も激増していった（表4－1参照）。しかし、高等学校は一八九九年当時でわずかに六校しかなく、希望者を十分に入学させることができなかった。こうしたことから、高等教育機関（とくに高等学校と大学）の増設を求める声は高まり、明治三十年代には帝国議会においてもしばしば問題となった。

一八九九年一月、帝国議会貴族院に「高等学校及帝国大学増設に関する建議案」が提出された。その建議案では増設の必要が次のように語られている。すなわち、「本学年の始に於ては各高等学校に入学を志願せる者三千百九十人中、入学を許されたる者千五百九十人、入学を許されざる者千六百人に至れり」と、高等学校入学志願者の過半数が入学できない現状を指摘し、こうした状況は「有為の青年をして志望を空しくせし」め、ひいては「国家の進運遅滞せしむるの虞なしとせず」、という

のである。そしてこの建議案は全会一致で可決された。

この当時の内閣は第二次山県内閣であり、文部大臣は樺山資紀であった。樺山は高等教育機関の増設に積極的姿勢を示し、「八年計画」を立てた。それは一九〇〇年度から〇七年度までの八年間に、大学四校、高等学校一二校、高等商業学校三校、工業学校七校（以上は既設のものも含めて）、農林学校五校を設置するというもので、初年度には第六高等学校、九州・東北両帝国大学、農林学校（盛岡）の新設または設備を予定した。

東北帝国大学の設置予定地は仙台とされ、樺山は一八九八年中に宮城県に対して設立寄付金の募集を求めていた。九州では福岡・熊本・長崎の三県が大学の誘致運動を起こした。こうして東北・九州における大学設置運動が始められたが、その設置は直ちに実現するには至らなかった。それは折から学制改革問題が論じられていたときであり、「八年計画」自体が閣議の了解を得られなかったためである。

けれども両地における大学設置の要望は強く、一九〇〇年一月の第一四回帝国議会衆議院には、星亨ほか三六名より「九州東北帝国大学設置建議案」が提出され、可決されるに至った。政府はこの建議を容れることはなかったが、東北・九州における運動はその後も継続されたのである。

北海道大学設置運動の開始

政府の大学増設の動きに札幌農学校関係者や札幌・北海道の有志も無関心ではなかった。以前から彼らは、札幌農学校（本科）の教育程度は駒場の農科大学に決して劣るものではない、と自負していた。一八九六年（明治二九）七月、農学校卒業式に臨んだ北海道庁長官原保太郎は、「札幌農学校は他日北海道大学の基礎となりて、益国家富強を翼賛するに至らんことを期す」と、早くも農学校の大学昇格問題に触れていた。また、予修科の設置が決まって間もなく発行された『札幌農学校』（一八九八年）には、「札幌帝国大学設立の必要を論ず」との一文が掲載され、農学校を大学とすべきであると論じていたのである。財政難や規模の縮

小という苦い経験を味わった農学校関係者には、政府の大学増設の動きに便乗して農学校を大学に昇格させ、その存立基盤を固めようとの意図もあったであろう。

大学設置運動は「八年計画」が発表された後の一八九九年（明治三二）春に開始された。この年五月に上京した農学校長佐藤昌介は、農学校関係者や札幌の有志の希望として、農学校を拡張して大学とするよう文部当局に申し出た。六月に開かれた北海道教育会総集会で同会評議員谷七太郎は、札幌農学校を拡張し「北海大学」を建設するよう文部大臣に建議することを提案し、同会は満場一致でこの案を可決した。農学校新築起工式に参加するため来札中であった寺田文部書記官も、この決議を聞き、その実現に尽力する旨語っている。七月七日、右の決議に基づき北海道教育会から「札幌帝国大学設立建議書」が文部大臣に提出された。

地元有志による運動もほぼ時を同じくして開始された。六月二十一日、来札中の憲政党幹事石塚重平を囲む有志の会が開かれた。この会に出席した森源三（元札幌農学校長、当時農学校商議員）は、農学校の大学昇格についての助力を石塚に請い、石塚もまた尽力する旨答えた。同月二十七日、豊平館において「大学設置に関する有志者協議会」が開かれた。出席者は大井上輝前、吉植庄一郎、谷七太郎、村田不二三、阿部宇之八、佐藤昌介、森源三ら二五名で、いずれも札幌の各界を代表する錚々たる顔ぶれである。この席で説明に立った農学校長佐藤昌介は、文部省の「八年計画」発表後東北・九州において大学設置運動は急速な展開を示し、東北では三五万円、九州では五〇万円の寄付を申し出ている現状を述べ、札幌でも大学設置の準備を早急に始めねばならないと語った。この協議会は七月に委員数名を上京させ、文部大臣に「北海道帝国大学設立建議」を提出した。北海道庁長官園田安賢も、右の建議についての「副申」を文部大臣に提出している。

こうして、一八九九年（明治三二）六、七月には、文部省や有力政党への働きかけがにわかに、活発に展開され、ある

程度当局者の理解を得ることに成功した。しかし同年八月初めころには「八年計画」の実現困難なことが伝えられ、運動は中断するに至った。

運動の再燃　一旦収束したかに見えた大学設置運動は一九〇〇年（明治三三）になると再び開始された。東北・九州における運動は「八年計画」の挫折後も展開され、一九〇〇年一月に議会に「九州東北帝国大学設置建議案」が提出されるに至ったことは前述したが、札幌における運動の再開もあるいは右の動きに触発されたものであろうか。

一九〇〇年一月、札幌区会は北海道帝国大学設立に関する意見書を北海道庁長官に提出することを決議した。二月、同件に関して札幌区長より内務大臣および道庁長官に上申書が提出された。同月、「北海道帝国大学設立期成同盟会」（以下「期成会」と略称）が有志により結成された。同会は「北海道帝国大学設立の請願」書を作成し、委員を上京させ議会に提出した。請願書は貴族院では手続上不備があるとして受理されなかったが、衆議院では採択され、二月二十二日にその説明がなされている。

同年十一月には次期議会（第一五回帝国議会）に向けての運動が始まった。期成会は再度貴族院へ提出すべき請願書への署名運動を行う一方、政府与党である政友会へ働きかけた。そうした運動は議会を動かすのに功を奏した。衆議院では政友会所属議員西原清東ほか一二名より「政府は速に札幌農学校を以て農科大学と為すの計画を立てられむことを望む」との建議案が提出され、一九〇一年（明治三四）三月二十二日に議決された。貴族院においても同月、期成会員より提出された請願書が受理可決され、貴族院議長より内閣に意見書が送付されるに至っている。

しかしながら、政府は大学や高等学校増設の必要は認めながらも、「財政上の都合に因り明治三十四年度に於ては未だ之に著手するに至らず。故に次年度に於て緩急を計りて之に著手する心算なり」（大学・高等学校増設計画に関する

質問書に対する政府答弁書、三月二十日）と表明しており、農学校を大学とする計画は実現しなかった。けれども運動は期成会や札幌区会を中心として、その後も継続された。

ところで、北海道帝国大学設置運動は東北帝国大学設置運動と密接な関連を有するようになっていた。当時は単科の帝国大学の設置は認められておらず、北海道帝国大学を設置するためには、農学校を農科大学とすると同時に他の分科大学を設置しなければならなかった。しかし、財政難を強調する政府にその予算を求めることは困難であるから、農学校を早急に大学とするための方法として、これを東北帝国大学の一分科大学としよう、との議論がでてきたのである。さきの衆議院における建議案の審査委員長となった井上角五郎は、建議の趣旨を次のように説明していたのである。

> 今や政府に於ても亦議会の希望する所も、東北に於て一の大学を設けることを希望しているのであるから、政府に於ても其意を容れられて東北大学が出来ることでございませうが、若し東北大学が出来る日に至つたならば、此札幌農学校は東北大学の分校として農科大学其他の学科を設けたいと云ふ、是が建議の趣意でございます。
>
> （『大日本帝国議会誌』第五巻、一二〇ページ）

併行して進められてきた九州と東北の大学設置運動のうち、九州については一九〇一年十二月に文部大臣菊池大麓がその設置を確約し、いちおうの成果を見た。翌年四月に京都帝国大学の分科大学の一つとして福岡医科大学が設置されるが、これは将来他の分科大学の設置と同時に京都帝国大学から切り離し、九州帝国大学を設置するという構想で設けられたものである。けれども、菊池はその後さらに大学を設置する必要を認めず、実業学校の増設を文部省の方針とした。こうして大学設置運動は再度暗礁に乗り上げ、しだいに冷却化していった。一九〇二年末ころには農学校長佐藤昌介をして、「今の文部省の方針にては札幌農学校を大学にするなどとはトテも見込みなかるべし」と嘆息

させるに至っていたのである。

成功こそしなかったが、一九〇〇年から〇二年に至る大学設置運動は一定の成果をあげた。それは、運動開始当時は某有力議員より、「北海道に大学を作ることを是認する社会あらば、富士の山の絶頂に能舞台を作ることにも同意すべし」などと冷笑され、北海道大学実現の可能性が全く否定されたりもしていたものが、貴衆両院において大半の議員の賛同を得るにまで至ったことである。そして、そのことはまた文部省が次に設置すべき大学を暗黙のうちに規定するものとなった。

農科大学設置決定に至るまで

菊池から児玉源太郎を経て久保田譲が文部大臣となった一九〇三年（明治三六）秋ころ、情勢はやや変化してきた。久保田は新聞記者に対して「官立学校中でも札幌農学校と東京高等商業学校は余程内容も発達して、今少しで大学になれる所迄進んで居る」との談話を述べ、農学校の大学昇格の可能性を示唆した。同じころ、文部省では札幌農学校を農科大学と改称することを協議中との報道が、新聞雑誌を通じてなされている。けれども、折から日露間では緊張の高まりを見せ、翌年二月には開戦の火蓋が切られたため、この問題にそれ以上の進展は見られなかった。

一九〇五年（明治三八）九月五日、ポーツマス条約が結ばれ日露間の講和が成立した。同月末、新築後の農学校を視察するために文部省実業学務局長真野文二が来札した。そして談話中、戦前に問題となった農学校の改称問題に触れ、都合によっては「農学校を農科大学と改めるやうになるかも知れぬ」と語った。農学校の大学昇格を再度示唆したこの発言は、満を持して機をうかがっていた札幌市民に、三度大学設置運動を起こさせるに十分な効果をもった。すなわち、地元新聞『北海タイムス』は、同社の理事であり、期成会の有力メンバーでもあった阿部宇之八の論説――「北海道開拓拡張意見」――を十月二十二日より連載し、その中で農学校を大学とすべきことを市民に訴えた。同紙

はさらに「北海大学設立意見」と副題を付した論説を十一月二十九日より一五回にわたり掲載し、その後もしばしば大学設置問題を紙面に掲げ、世論を盛り上げた。北海道会では十一月三十日に、「北海道帝国大学設立ニ関スル建議」（内務大臣あて）と題する建議案が提出され、即日可決されている。

翌一九〇六年（明治三九）三月牧野伸顕が文部大臣に就任した。牧野は日露戦後の教育の充実を文部省の基本方針とした人物で、一九〇七年の義務教育年限の延長（四年→六年）も彼の手でなされている。そして大学増設問題にも積極的であった。

同年五月、北海道庁長官園田安賢は北海道事業計画案を発表した。それは「帝国戦後経営ノ方針ニ副ヒ一ハ以テ本道拓殖ノ大成ヲ期」して計画されたもので、折から進行中であった北海道十年計画と併行して進めようとするものであった。そして、その具体的な事業項目として、築港・土地改良などと並んで大学および大学予科の設置も含まれていたのである。大学設置問題はここに至って単なる世論ではなく、北海道拓殖計画上に位置づけされ、運動はより強力に推進されることになる。

六月、札幌区会は大学設置に関する建議を可決した。七月、期成会は委員を上京させて要路への働きかけを強化した。同じころ大学設置問題のため道庁の湯原事務官も上京している。八月十五日、公爵二條基弘を会頭とする北海道協会は、「北海道農科大学設置に付意見書」を牧野文相に提出した。札幌では同じころ市民によって文部大臣あて陳情書への署名運動が展開されている。九月十五日、札幌で政友会札幌支部大会、引き続いて政友会東北大会が開かれた。そして、支部大会では「北海道大学を設立すること」を、東北大会では「札幌農学校を大学に進め」ることを議決した。十一月一日、札幌区会は大学設立のための寄付金一〇万円を募ることを可決した。その前日には期成会より区会に、寄付金のうち半額の五万円は期成会の責任において募集する旨、通知がなされていた。

こうして、大学設置運動は、札幌市民、政界、官界、言論界など幅広い支持を受け、かつてない高まりを呈していったのである。

この間大学設置の成否に関するさまざまな情報が流れた。七月ころには早くも設置は内定したといい、また文部次官は農学校の大学昇格には否定的な談話を発表したり、あるいは「目下詮議中」であるとも報道された。

文部省は東北大学設置（同時に札幌農学校を同大学の分科大学とする）、および福岡に工科大学を設置し医科大学と合わせて九州大学とする方針で、一九〇七年度の予算案を練った。問題は大蔵省が文部省の要求を認めるか否かであった。しかし、大蔵省は大学設置に要する文部省予算を削除したとの報が、十一月二十日札幌に伝わった。翌二十一日、急遽札幌区会が開かれ、札幌農学校を農科大学とする建議案が可決され、即日議長名で「札幌農科大学ヲ明治四十年度ニ於テ設立セラレムコトヲ望ム」との意見書が、内務大臣にあて発せられた。休会中であった北海道会も同日突如開会され、道会議長藤井民之助より提出された建議案「北海道帝国大学速成ニ関スル件」を満場一致で可決し、直ちに内務大臣にあて送付した。

大学設置の成否はこの時期には全く財政上の問題となっていた。しかし、この問題は古河財閥からの一〇〇万円余の寄付申し入れによって急転直下解決した。古河からの寄付は十二月四日の閣議で了承され、六日文部省より正式に許可された。このとき古河から出された願書およびそれに対する文部省の指令は次のとおりである。

献納願

今般政府に於て福岡に工科大学、仙台に東北帝国大学理科大学、札幌に東京（ママ）帝国大学農科大学御設置可相成御計画有之趣承り候に付、右に要する建物貴省御設計の通り建築致し、且貴省御指定の年限内に落成献納致度、尚右御許可の上は建築工事に関する一切の事務は貴省に於て御引受被下度、之に要する経費は現金を以て納付可致候。

右献納御許可相成度此段奉願候也。

明治三十九年十二月三日

東京市日本橋区瀬戸物町七番地　願人　古河虎之助
同市神田区駿河台北甲賀町十六番地右　後見人　木村　長七

文部大臣牧野伸顕殿

文部省文書課午雑令二九八号

明治三十九年十二月三日付献納願の趣聞届候條、左記命令書の通心得請書提出可被成候也。

明治三十九年十二月六日

文部大臣　牧野　伸顕

古河虎之助殿
右後見人
木村　長七殿

命令書

一、建築に要する経費は九十八万七千七百三十九円にして其内訳左の通

福岡工科大学建築費六十万八千五十円

内訳

(一)	土木機械教室	木造 二階 平家	四〇〇 一三五	煉瓦造 二階 平家 五〇〇 三〇〇	工事費 一八八、七〇〇円

(二)	採鉱冶金教室	平家	三〇〇	平家 二七〇	一一五、一〇〇
(三)	電気工業教室	平家	四六〇	平家 二〇〇	一〇三、七五〇
(四)	応用化学教室	平家	五三〇	平家 四七七、五	二〇〇、五〇〇

東北帝国大学理科大学建築費廿四万四千百七十円

内訳

(一)	教室	木造	平家 二八七 二階 三六七	煉瓦造	平家 二一八 二階 二八一 二階 四〇	工事費	二四四、一七〇

東北帝国大学札幌農科大学建築費十三万五千五百十九円

内訳

一	大学予科及実科教室	木造	二階 二二〇 平家 一三〇	煉瓦造	……	工事費	四三、一五〇
一	農芸化学教室		平家 三六五		……		三二、〇五〇
一	林学教室		平家 二〇五、五		二階 二〇 平家 一一〇		三一、三九〇
一	畜産教室		平家 三二一		三階 二〇		二八、九二九

二　落成期限は明治四十年四月一日より向五ヶ年と被致度事。

三　建築工事に関する一切の事務は当省に於て出願の通可引受に付、右に要する経費六万九千百三十七円は現金を以て、明治四十年四月一日より向五ヶ年間に初年より第四年までは毎年一万三千五百円、第五年に一万五千百卅七円を、毎年四月一日に納付可相成事。

四　第一項建築に要する経費年割額は二十二万円を超過せざる事。但最後の年割額は此の限にあらざる事。

五　第三項の事務費は工事終了まで順次繰越使用すべき事。

（『報知新聞』一九〇六年十二月七日）

古河のこの挙に預かって力あったのは、時の内務大臣であり、古河鉱業会社の顧問でもあった原敬である。原はまた、農学校長佐藤昌介とは同郷で、明治初年には盛岡藩校作人館でともに学んだ仲でもあった。その原が古河の寄付の根回しをしたことが、彼の日記に次のように記載されている。

（十一月）十七日　東北大学其他に関し牧野文相来訪内談せり、財政の都合にて東北大学、札幌農科大学、九州理工科大学ともに大蔵省の削減に遭ふて困難する由に付、兼て古河家に於て公共的献費の企も之ありしに因り新営費を支出して献納せしめんとの考あり、且つ此際大学設立尤も必要に付文相に兼て内議し置きたる為めなり、此献納あれば始めて大学の設立を見る事にて国家の為めにも甚だ利益なりと信じたるなり。

三十日　井上を訪ふて古河より大学建築寄附の事を相談して同意を得たり、近来富豪より種々の寄附を出すものあり、授爵などの魂胆もあらんが、兎に角右様の次第故古河も此儘に打過ぎては世間の非難を免がれざる事に付、兼て公共的に相当の寄附をなすを得策と考へ、古河重役、戸主、陸奥等にも内話せし事あり、然るに今回文部省は仙台東北大学、札幌農科大学及び福岡工科大学を設立せんとし、大蔵省の査定により削減せられ殆んど絶望の姿なるにより、之を建築して寄附するは国家の為めにも古河家名誉の為めにも甚だ喜ぶべき事に付、陸奥始め重役等に内議し、牧野文相にも内々相談して同意を得、遂に井上に相談したるなり、井上至極適当なりとして快諾せり。（『原敬日記』第二巻、福村出版、一九六五年、二〇七・二一〇ページ）

古河のこの行為は「富豪の寄附金」「富豪の美挙」として世に喧伝され、多くの賛辞を得た。古河虎之助に対して、札幌区会は感謝状を送り、宮城県会や仙台市会も謝電・謝状を送ったという。しかし、古河の寄付の背後には、原の日記からもうかがえるように、当時議会でも問題となり世間を騒がせていた古河の経営する足尾銅山鉱毒問題に対する批判をかわそうとの意図もあったのである。

それはともあれ、大学設置予算を含んだ政府予算案は問題なく議会を通過し、ここに一九〇七年度における農科大学の設置が決定したのである。なお、札幌区からの一〇万円の寄付申出も文部省の許可を得、一九〇七年度より三年間の分割払いとすることが決定した。

大学設置論　高等学校や大学の増設の必要が叫ばれた理由は、一般的には進学希望者数に比べて、その収容力が小さいということであった。では札幌に大学を設置しなければならないとした理由は何であったろうか。札幌区会・北海道会・帝国議会に提出された建議や請願、あるいは当時の新聞・雑誌などに発表された大学設置論*に、その理由が種々語られている。それらの議論の多くは、まず札幌農学校を農科大学とし、次いで他の分科大学を順次設置し、最終的には農・工・理・医・法文の五分科大学よりなる北海道帝国大学を設置しようとするものであった。そしてそれらが論じた大学設置を必要とする理由は、ほとんど次の三点に要約される。

その第一は北海道拓殖上の理由であり、それは次のようなものであった。(一)、北海道の産業や事業を発展させるためには多くの技術者を必要とする。その人材養成に大学の設置は欠かせない。(二)、大学は移住者を北海道へ引きつけるのに役だつ。(三)、植民地である北海道にとって、大学はその教化の上で良い影響を与える。(四)、大学は北海道文化の向上に寄与する。(五)、拓殖上大学設置の必要性は、欧米諸国の先例にかんがみて当然である。

第二は、札幌農学校は多大の経費を要さずに大学とすることができる、という経済上の理由である。(一)、農学校には広大な土地があり、収入もかなりあるから、大学運営のための国庫支出は多額を要しない。(二)、農学校には広大な土地があり、大学創設に当たり土地買収等の必要がない。(三)、建物や諸設備もかなり整っており、これに要する経費も少ない。

そして第三の理由とされたのは、札幌が学問をするのに好適地であるということであった。(一)、北海道の気候が学

生を健全にし、学術研究に適したものであることは、欧米の有名大学が多く北部にあることを見ても明らかである。㈡、北海道は人民が質朴で、かつ自然が豊かであり、札幌は学生の風紀上適した場所である。㈢、風土気候の異なる土地で勉学することは、学生の知識を広める上で有益である。㈣、北海道は学生の就学費が安い。

最も強調されたのは第一の拓殖上の理由、特に人材養成の問題である。札幌農学校の設立目的自体が開拓に要する人材養成ということにあり、その後農学校が苦境に陥るたびにこのことが何度も叫ばれてきた。そして、農学校を大学とすべき最大の理由としてまたそのことが繰り返し強調されたのである。

＊　新聞・雑誌などに掲載された大学設置論の主なものとして、次のものがあげられる。

一　「札幌帝国大学設立の必要を論す」＝『札幌農学校』所収、一八九八年六月。

二　「北海道大学の要望」＝『北門新報』論説、従来この論説は一八九八年三月のものと言われてきたが、内容から判断してその時期ではあり得ない。一八九九年ころ書かれたと思われる。

三　「北海道大学設立の必要を論ず」＝『北海タイムス』社説、一九〇二年一月十一日より連載。

四　尾原亮太郎「本道に国庫費を以て高等学校大学予科の設立あらんことを望む理由書」＝表題は高等学校設置論であるが、内容的には大学設置論であるとも言える。この理由書に基づき一九〇二年十一月、北海道会で表題と同様の建議案が可決された。『北海道教育雑誌』第一一九号所収（一九〇二年十一月）。

五　東牧堂「文教振作論（北海大学設立意見）」＝『北海タイムス』論説、一九〇五年十一月二十九日より連載。

六　東武「北海道大学設置論」＝北海道教育会第一六回総会（一九〇六年七月十五日）における演説。「北海道大学論」の題で七月十八日より『北海タイムス』論説として連載。『北海道教育雑誌』第一六三号（一九〇六年八月）にも所収。東武は東牧堂と同一人物。

以上のうち二、三、五、六は、期成会から発行された二冊の『北海道帝国大学論集』（一九〇二年五月、一九〇六年八月）に掲載されている。

第二節　農科大学の組織と機構

農科大学の設置

一九〇七年（明治四〇）六月二十二日、勅令第二三六号により、仙台に東北帝国大学を置き札幌農学校を東北帝国大学農科大学とすることが公布された。同日、東北帝国大学農科大学官制（勅令第二三七号）および農科大学に置く講座が決定され（同第二四〇号）、二十四日には農科大学に設置する学科が（文部省令第二一号）、二十七日には「東北帝国大学農科大学規則」が制定され、農科大学の教育組織や制度に関する規程類はほぼ整備された。

同年九月一日、右の勅令等が施行され、東京・京都に次ぐ三番目の大学として東北帝国大学が設置された。札幌農学校が創立されて三一年目のことである。この間北海道の人口も一八万人から二四〇万人へと増加していた。併行して設立準備が進行していた仙台の理科大学や福岡の工科大学に比べ、農科大学が逸早く設置されたのは、直ちに大学への改組が可能な農学校が札幌にはあったためである。

開校式は一〇日後の九月十一日に、農科大学水産学講堂において挙行された。君が代奏楽、教育勅語奉読、学長式辞、文部大臣演説、来賓祝辞、祝電披露などがあり、式は終わった。この日式に参列した者は、学生・生徒、職員、来賓ら千三百余名であったという（学長式辞、文部大臣演説は巻末の史料を参照）。

農科大学は言うまでもなく帝国大学令にいう「学術技芸ノ理論及応用ヲ教授」する所であるが、同大学はその予備教育機関である大学予科、および高等専門学校程度の教育を行う農学実科・土木工学科・林学科・水産学科を付設していた（以下、大学教育を行う所を大学本科、大学予科を予科と略し、また農学実科以下を付設学科と総称し、便宜使用する）。

大学本科生は「学生」、予科・付設学科生は「生徒」と呼ばれた。旧札幌農学校の学生・生徒は、農芸科を除き、農科大学各科に次のように編入された。すなわち、新学年から旧札幌農学校本科一、二、三年生はそれぞれ大学本科一、二、三年生となり、予修科一、二年生は大学予科二、三年生となった。農学校の土木工学科と林学科の一、二年生は大学付設の土木工学科・林学科の二、三年生となった。そして、この年開設されたばかりの水産学科一年生はそのまま大学付設水産学科の一年生となったのである。なお、農芸科は旧則により存続したが、生徒募集を行わず、在学生全員が卒業した一九〇九年（明治四二）三月に廃止された。

以下、農科大学規則等により各科の組織や制度を概観しよう。

農科大学の概要

(1)大学本科　大学本科は予科の卒業生を優先的に入学させ、欠員のある場合のみ高等学校（大学予科第二部）の卒業生の入学を許可した（ただし、定員についての規程はない）。修学年限は三年である。

本科には農学科・畜産学科・農芸化学科・林学科の四学科が置かれた。このうち開校と同時に開設されたのは農学科と農芸化学科である。旧札幌農学校本科の二年生・三年生は皆農学科生となり、一年生のみが農学科と農芸化学科に分けて編入された。畜産学科と林学科が開設されたのは一九一〇年（明治四三）九月である。

一九一三年（大正二）六月、農科大学規則を改正し、農学科を三部、畜産学科を二部に分け、新年度である同年九月から施行した。農学科第一部では農業生産に関する分野、第二部では農業経済、第三部では農業生物、畜産学科第一部では畜産学、第二部では畜産学のほかに獣医学を、それぞれ中心としたカリキュラムを編成し、両学科の専門化を図ったのである。

それと同時に学生の履修方式も改め、学生たちは一定の教科目群の中から必修時間数を満たすだけの科目を随意に

選択することになった。学科により決められた一週当たりの必修時間に違いがあるが、一年・二年では講義が一八～二一時間、演習・実験・実習などが四～六回であり、三年になるとその時間はかなり減少している。これは従来の詰め込み主義的な教育を改め、学生に自学・自修の時間を与えようとしてとられた措置である。また試験・進級制度も改正された。従来は各科目とも五〇点以上であり、かつ平均六〇点以上の者を及第として進級させていたが、合格点を六〇点として不合格科目二科目以内の者はかりに進級させ、その科目については後に特別試験をすることにしたのである。

農科大学に置かれた講座は、初め農学第一・同第二・農芸化学第一・同第二・農芸物理学・植物学・動物学昆虫学養蚕学第一・同第二・同第三・園芸学・畜産学・農政学殖民学の一二講座であったが、順次増設され一九一八年までに二七講座となった。講座の増設状況とその学科への配置、および担当者の変遷を表4―2に示した。

なお、大学本科には正規の学生のほかに、一科目あるいは数科目の修学を志願する者を選科生として入学させる制度があり、毎年数名が選科生として在学している。

(2)大学院　帝国大学には分科大学のほかに、「学術技芸ノ蘊奥ヲ攻究」する大学院を置くことになっていた。東北帝国大学にこれに関する規程（東北帝国大学大学院規程・東北帝国大学大学院農科学生規程）が設けられたのは、第一回目の卒業生を出した一九〇八年（明治四一）七月である。大学院の在学年限は三年以上五年以下である。入学志願者のうち分科大学卒業者は教授会の議を経て総長が入学を許可したが、他の者には学力試験を課した。大学院学生は学長が選定した教授の指導により一定の研究を行い、毎年その成果を学長に報告するものとされた。一九一三年（大正二）に最初の大学院学生として坂村徹ほか三名が入学したが、その後は二名の入学者があったにすぎない。

(3)大学予科　大学予科は高等学校大学予科第二部に相当する教育機関である。当時高等学校には法学部・工学部・

表4－2　講座の設置状況と担当者（1907.9～18.3）

学科		講座名	設置年月	講座担当者の変遷
農学科	第一部	農学第一	07.9	南鷹次郎，明峰正夫（分担），東海林力蔵（分担），南鷹次郎
		農芸物理学	07.9	時任一彦
		動物学昆虫学養蚕学第三	07.9	須田金之助
		園芸学	07.9	星野勇三
		農学第三	15.7	明峰正夫（分担），東海林力蔵（分担），明峰正夫
		農学第四	17.9	東海林力蔵
	第二部	農学第二	07.9	佐藤昌介，高岡熊雄（兼担），佐藤昌介
		農政学殖民学	07.9	高岡熊雄
		経済学財政学	15.7	高岡熊雄（分担），中島九郎（分担）
	第三部	植物学第一	07.9	宮部金吾
		動物学昆虫学養蚕学第一	07.9	八田三郎，田中義麿，八田三郎，田中義麿，八田三郎
		動物学昆虫学養蚕学第二	07.9	松村松年
		植物学第二	08.5	柴田桂太，大野直枝，郡場寛，伊藤誠哉
農芸化学科		農芸化学第一	07.9	大島金太郎（兼担），吉井豊造，鈴木重礼，吉井豊造（兼担），三宅康次
		農芸化学第二	07.9	大島金太郎
		農芸化学第三	08.5	大島金太郎（兼担），三宅康次，大島金太郎（分担），田所哲太郎（分担）
		農産製造学	10.3	吉井豊造
		応用菌学	15.7	半沢洵
林学科		林学第一	09.5	小出房吉
		林学第二	10.3	新島善直
		林学第三	11.5	新島善直（兼担），宮井健吉
		林学第四	11.5	内山幸三（分担），影山純介（分担），吉川元民（分担）
		林政学及森林管理学	12.5	宍戸乙熊
畜産学科	第一部	畜産学第一	07.9	橋本左五郎
		畜産学第二	10.3	橋本左五郎（兼担），高松正信
	第二部	獣医学第一	10.3	加藤泰治
		獣医学第二	11.5	小倉鉀太郎

備考　「分担」とは一講座を複数の教師が同時に担当することであり，「兼担」とはある講座担当者が別の講座も担当することである。

医学部等の専門学部と、ほかに大学予科を設置できるとされていたが（高等学校令）、実際には学部生よりも予科生が圧倒的に多かった。そして大学予科は進学すべき大学により、第一部（法・文）、第二部（工・理・農）、第三部（医）に分けられていたのである。

予科の修学年限は三年で、中学卒業者または専門学校入学者検定合格者を、試験の上入学させた。定員は三学年合わせて三〇〇人である。修学科目は倫理・国語・英語・ドイツ語・数学・測量・物理学・化学・植物学・動物学・地質及鉱物学・図学・兵式体操であった（一部随意科目）。一九一一年（明治四四）倫理は修身となり、一四年に歴史・論理・ラテン語が随意科目として追加された。予科には主任が置かれた。初代の予科主任となったのは青葉万六（主任心得）で、その後溝口進馬、渡辺又次郎へと代わっている。

(4)付設学科　農学実科・土木工学科・林学科・水産学科は、修学年限三年でいずれも高等な専門教育を行う機関である。水産学科のみ漁撈部・養殖部・水産製造部の三部に課程が分かれていた。入学資格は予科と同一で、定員（三学年合計）は、水産学科が一八〇人、他は九〇人である。林学科は大学本科に「林学科」が開設された一九一〇年九月、林学実科と改称した。付設学科にもそれぞれ主任が置かれた。各科主任を勤めたのは、農学実科が南鷹次郎、林学科（林学実科）が宍戸乙熊（主任心得、のち小出房吉）、土木工学科が坂岡末太郎、水産学科が遠藤吉三郎（主任心得、のち藤田経信）である。

各科卒業生のうちさらに研究を志願する者のために研究生の制度が一九一二年に設けられた。期間は二年で満期の際には研究報告書を提出することが義務づけられている。

(5)学期　本科・予科・付設学科ともに、学期や休業日は統一された。一年は三学期に分けられ、第一学期は九月十一日～一二月七日、第二学期は一月八日～四月七日、第三学期は四月八日～九月十日となった。また休業日は、冬期休

業が十二月二十五日～一月七日、春期休業が四月一日～四月七日、夏期休業が七月十一日～九月十日である。以上は札幌農学校当時と同一である。一般的な祝日のほかに、六月二十二日が休業日となった。この日は東北帝国大学農科大学記念日とされ、毎年記念式が行われている。

なお、一九〇七年五月に開講した水産学科（当時は札幌農学校）は、同年度の第三学期を延長し、翌年度からは他科と同様九月開始となった。

(6)授業料・特待生・奨学貸費　農科大学には、学力優等品行方正な者を特待生とし、授業料を免除する制度があった。各科の一年間の授業料は、本科三五円（一九一一年より五〇円）、予科三〇円（同三五円）、付設学科三〇円である。大学院は授業料を徴収しなかった。

また本科学生に限り「奨学貸費」の制度があった。これは学力優等生で学資支弁の困難な者に年額一二〇円以内を貸与し、卒業後月賦返還させるというものである。その財源は寄付金をもって充てられた。在学中に死亡した学生の家族から一九一〇年（明治四三）七月に「故穂積貞三奨学資金」との名義で一〇〇〇円寄付されたのが最初の資金となった。その後「佐藤博士就職二十五年記念奨学資金」（一二年、一三年）、「故森源三奨学資金」（一二年）、「吉井博士開講二十五年記念奨学資金」（一三年）、「鈴木武良就職二十五年記念奨学資金」（一五年）、「橋本博士在職二十五年記念奨学資金」（一七年）の名義で寄付がなされている。

このほか、予科を除く学生・生徒のうち、卒業後実業学校の教師を志望する者は、「文部省学資補充規則」により月額六円以内の支給を受けることができた（のち学資支給は廃され、授業料免除となる）。

(7)卒業生の資格　農科大学第一回目の卒業式が行われたのは、一九〇八年（明治四一）七月四日である。この日大学本科二五名、予科三六名、土木工学科二六名、林学科二〇名が卒業した。農学実科と水産学科が卒業生を出すの

は、やや遅れて一九一〇年以降となる。大学本科を優等な成績で卒業した者には銀時計が下賜されるようになった。第一回卒業式でそれを獲得したのは、後に北大総長となった伊藤誠哉と桑山茂である。

大学本科卒業生のうち、林学科出身者は「林学士」、他学科の出身者は「農学士」と称することが許され、また出身学科により文部大臣の指定する一定の学科目につき、教員免許の無試験検定を受けることができた。さらに畜産学科（のち畜産学科第二部）卒業生は、無試験で獣医免状を取得できた。

付設学科の卒業生もそれぞれ「農学得業士」「工学得業士」「林学得業士」「水産学得業士」と称することが認められた。一九一三年に、付設学科卒業生は東北帝国大学理科大学の受験資格を満たす者と認定され、同大学へ進学することも可能となった。水産学科漁撈部卒業生については、一定の漁撈船乗組や航洋船舶乗組期間を満たすことにより、漁撈職員試験あるいは船舶職員試験の受験資格が与えられた。

農科大学の職員　農科大学官制により農科大学には学長・教授（勅任官または奏任官、一二人＝定員、以下同）・助教授（奏任官、八人）・学生監・助手（判任官、一五人）・書記（判任官、一〇人）・植物園長・農場長・演習林長が置かれることになった。予科・土木工学科・林学科・水産学科には別に教授（奏任官、一六人）・助教授（判任官、七人）が置かれている。学長・学生監・植物園長・農場長・演習林長は専任者が置かれず、学長は教授のうちから、他は教授または助教授のうちから文部大臣により任命された。学長となったのは農学校長であった佐藤昌介で、学生監以下にはそれぞれ橋本左五郎・宮部金吾・南鷹次郎・宍戸乙熊（のち小出房吉）が任命されている。旧札幌農学校の職員のほとんどは、農科大学の設置と同時に同大学職員となっている。

一九一〇年（明治四三）十二月、東北帝国大学官制が制定され、翌年一月一日東北帝国大学理科大学の設置と同時に施行された。この官制の施行に伴いさきの農科大学官制は廃止された。新官制により東北帝国大学には次の職員が

表4－3　農科大学の外国人教師

名前	原綴	国籍	在任期間	担当科目
モルガン	John B. Morgan	米	1907.9～1911.7 1917.8～1921.3	英語
コラー	Hans. Koller	スイス	1908.7～1925.1	ドイツ語
ミュラー	J. C. Max. Müller	独	1911.8～1914.7	馬学
クリーランド	Gail Cleland	米	1911.8～1914.7	英語
ローランド	Paul Rowland	米	1914.8～1917.7	英語
ボルダーストン	Lloyd Balderston	米	1917.10～1920.12	皮革製造学

置かれることになった。すなわち、大学本部職員は総長（勅任官）・事務官（奏任官）・学生監・書記であり、各分科大学職員は学長・教授・助教授・助手・書記である。また農科大学には別に植物園長・農場長・演習林長（教授または助教授が兼任）、および付属の予科・土木工学科・水産学科に教授・助教授が置かれている（農科大学職員定員の変化は巻末の統計「14　東北帝国大学農科大学教職員定数の変化」を参照）。

以上は東北帝国大学の官制上の職員であるが、農科大学には発足当時から官制外の職員が数多くいた。そのうち教授や助教授とともに教育を担当したのは外国人教師と嘱託講師である。外国人教師は一九一七年までに六人雇い入れられ、主に語学や畜産学関係科目を担当した（表4－3参照）。嘱託講師は毎年十数名いた。法学・ドイツ語・兵体式操その他の科目を担当している。ほかに雇や嘱託がおり、諸種の事務を担当した。

一九〇八年十月「副手規程」が制定され、副手が置かれるようになった。副手は助手と同様の職務を有したが、原則として無給であった。

総長・学長

総長は「帝国大学ヲ総轄シ帝国大学内部ノ秩序ヲ保持」することを職責とした。東北帝国大学官制の施行された一九一一年（明治四四）一月一日、文部次官岡田良平が「総長事務取扱」となったが、それ以前は農科大学長が総長の職務を代行していた。

同年三月二十四日、初代総長に沢柳政太郎が任ぜられた。沢柳は以前に二高・一高

校長、文部省普通学務局長、文部次官などを歴任し、後には成城学園を創設した人物である。そしてその後北条時敬（一九一三年五月九日）、小川正孝（事務取扱、一七年八月二十五日）、福原鐐次郎（一七年十月二十五日）へと総長は交替した。福原総長時代の一九一八年（大正七）四月一日、農科大学は東北帝国大学から分離して北海道帝国大学農科大学となるのである。

学長は総長の監督下において分科大学の学務を統理することを職務とした。また、官制により「総長ハ其ノ職権ニ属スル事務ノ一部ヲ農科大学長ニ委任スルコト」が認められていた。岡田は総長事務取扱となると同時に、職員出張や講師嘱託など九項目についての権限を農科大学長に委任したが、沢柳が総長となった後の一九一一年六月、委任事項は次の一七項目に改められた。

委任事項

一　三大節ニ於ケル判任官ノ拝賀ヲ受ケ之ヲ文部大臣ニ上申スル事
二　高等官ノ除服出仕、請暇願、任地外居住、他官庁其ノ他ノ事業嘱託ニ応スルノ願ヲ許可スル事　但シ嘱託ノ報酬ヲ受クル場合ヲ除ク
三　高等官以下ノ職員ヲ内国ニ出張セシムル事
四　学長不在中其ノ事務ヲ高等官ニ代理セシムル事
五　高等官以下ノ職員ノ事務分課ヲ命スル事
六　講師及副手ヲ嘱託スル事
七　雑給及雑費支弁ニ属スル職員ノ進退ニ関スル事
八　七日以内臨時休業スル事
九　委任条件其ノ他ノ諸規則ノ範囲内ニ於テ処務細則ヲ設クル事

十　内閣統計年鑑資料、文部省年報材料、官報々告材料ヲ文部省ヘ提出スル事
十一　建築工事ノ設計及変更ニ関シ文部大臣ニ稟議スル事
十二　歳入徴収官ノ事務取扱ニ関スル事
十三　会計規則第九十一条第一項検査ニ関スル事
十四　農科大学ノ用ニ供スル資金所属不動産ノ管理ニ関スル事
十五　農科大学ノ用に供スル資金ノ現金、有価証券ノ出納保管ニ関スル事
十六　奨学費寄附金ノ委任経理ニ関スル事
十七　農科大学学生生徒ノ事務条例第五十五条ニ依ル在学証明書ヲ作成スル事
右第二項中高等官ノ嘱託及解嘱ハ事後之ヲ総長ニ報告シ、其ノ他ノ事項ニ関シ文部省其ノ他ノ官庁等トノ照会応答ハ直接之ヲ為ス事

評議会・教授会・協議会

帝国大学令によって、帝国大学には評議会を設け、各分科大学には教授会を設けることが定められていた。しかし、一九〇七年六月の勅令第二三六号により、東北帝国大学については帝国大学令中の評議会に関する規程を当分適用しないとされていた。この勅令は、農科大学・理科大学に次いで医科大学が設置された後の一九一五年（大正四）九月に改正され、東北帝国大学にも評議会が置かれることになった。

評議会とは、各分科大学の学科の設置・廃止、講座の種類、大学内の制規、学位授与、その他文部大臣や総長から諮詢のあった件につき審議する機関で、ほかに高等教育に関する意見を文部大臣に建議することが認められていた。総長が議長となり、評議員は各分科大学長および各分科大学教授一名（互選により選出、任期三年）により構成された。最初の評議員となったのは、農科大学長佐藤昌介、同教授宮部金吾、理科大学長小川正孝、同教授林鶴一、医科大学長山形仲芸、同教授井上嘉都治の六名である。

第一回の評議会は一九一五年（大正四）十月十三日に開催され、はじめに全五ヵ条からなる「東北帝国大学評議会規則」を定めた。同規則により、評議会は出席議員が過半数に達しないとき、または一分科大学の議員全員が出席しないときは議決することができないこと、議事は出席議員の過半数により議決し、可否同数の場合は議長が決することなどが定められている。規則決定後、文部大臣から諮問のあった大学令案についての審議、星野勇三ほか二名を博士に推薦することなどが審議された。翌年五月に開かれた評議会では、理科大学に応用化学科を設置し、農科大学には畜産学第三講座・農学第四講座を増設することが議決されている。

教授会は、分科大学の学科課程、学生試験、学位授与資格の審査、その他文部大臣または総長から諮詢のあった件を審議する機関で、学長を議長とし、教授を議員とした。ほかに学長が必要とした場合には、助教授・講師の列席も認められていた。ただし、原則として助教授や講師は議決に参加できなかったようである。第一回教授会は一九〇七年（明治四〇）九月十七日に開かれた。佐藤学長のほか農科大学教授六名、助教授三名、講師一名、それに予科教授一名が出席し、毎月第一火曜日を定日として教授会を開くことを決め、また学生の服制などについて話し合っている。

このほか農科大学には、大学予科や付設学科に関し、学科課程、授業・試験、訓育、書籍・器械・標本等の設備、そのほか学長の必要とする事項に関する審議機関として、各学科主任協議会、各学科教官協議会、各学科教官聯合協議会があった。いずれも教授会の議決に基づいて設置されたもので、各学科教官協議会は各学科に個別なことがらについて、他は各学科に共通する事項について審議している。各学科教官協議会と各学科教官聯合協議会はその後廃止され、代わって一九一一年九月に各学科教授会が設置された。

事務組織

札幌農学校が北一、二条から北八条に移転した際、農学校事務室も北八条西六丁目にあった旧第一農場事務室に移った。そして、その建物が農科大学の事務室として引き続き使用された。

「農科大学処務規程」（一九〇七年九月制定）により、農科大学には学生監部・庶務課・会計課・学長付主事が置かれることになった。学生監部では学生生徒の賞罰・集会・衛生・風紀や寄宿舎に関する事務を扱った。学生監となったのは橋本左五郎である。

庶務課（庶務係・教務係）と会計課（経理係・収入係・支出係・用度係・監査係・機関係〔一九一一年追加〕）には課長が置かれ、書記や雇が配され諸事務を扱った。庶務課長は新居敦二郎（のち小川忠之助）、会計課長は工藤直方が命ぜられている。学長付主事は学長の命により臨時調査や教務に従事した。初め森本厚吉がこれを勤め、のち有島武郎も加わったが、一九一二年（大正元）十月廃止された。また一九〇九年（明治四二）十二月に庶務課教務係は教務部として独立した。教務部には主任が置かれ、学長付主事であった森本厚吉が初代主任となり、その後時任一彦へと引き継がれた。

一九一二年（明治四五）五月、東北帝国大学の事務官が二名に増員され、一名が農科大学に勤務することになった。事務官には傭人の人事や教務・庶務・会計などに関する事務のうち、学長の裁定を必要としない程度のことを専行する権限が委任された。初代事務官として同年六月に三沢寛一が赴任し、翌年大岡叢に代わった。

諸施設

札幌農学校の土地・建物・農場・植物園・演習林などはすべて農科大学に引き継がれた。ここではそれらのその後の増設・充実状況を概観しよう。

(1)講堂　一九〇七年（明治四〇）十月に大学予科講堂の建設が始まったのを皮切りに、あいついで諸建物が起工・竣工していった。すなわち、一九〇八年八月大学予科・土木工学科講堂、〇九年九月農芸化学講堂、一〇年五月林学科講堂（古河講堂）および畜産学科講堂が落成した。以上の建物はすべて古河虎之助の寄付によるものである。

その後一九一四年（大正三）十二月に畜産学講堂・農学講堂・図書館などの増築工事および植物学実験室の新築工

事が完成し、一六年十二月には中央講堂が落成した。これで農科大学の主な建築はほぼ完了した。なおこの間、大学予科・土木工学科講堂建設地近くにあった第二農場建物は、北一八条に移築されている。

(2)農場　農科大学となった後も農場の経営は従来の方法が踏襲された（直営＝第一農場〔実験農場〕・第二農場〔経済農場〕、小作経営＝第三～第八農場）。農場長として農場全体の管理に当たったのは南鷹次郎である。一九一二年（大正元）九月、後志国余市郡余市町大字山田村に約七〇〇〇坪の土地を購入し、これを余市果樹園と名づけ、直営の実験農場とした。ここではりんごの栽培が主として行われた。

各農場の開墾は進み、一九一八年までに全体の九割近くが既墾地となった。それに伴い農場からの収益も増加し、一九一七年度には農場収入が経費を約五万円上回るに至っている。

第一農場は各種の作物を実験的に栽培し、第二農場では穀類・豆類・牧草類を主に栽培した。第三農場以下の小作農場では穀類と豆類が生産物の大半を占めた（表4－4参照）。

表4－4　小作農場の主な生産物（1917年度）

作物	収穫量
菜豆	14,987石
豌豆	10,683〃
燕麦	9,002〃
水稲	2,754〃
大豆	2,028〃
玉蜀黍	1,953〃
秋蒔小麦	800〃
裸麦	748〃
小豆	730〃
馬鈴薯	72,228俵

備考　『北海道帝国大学農科大学農場事業概要』（1918年）149—150ページより作成。このほか蕎麦，黍，粟などが200石以上の収穫をあげている。

(3)演習林　札幌農学当時の第一・第二基本林は、一九〇七年にそれぞれ雨龍演習林・天塩演習林と改称され、これに苫小牧演習林を加え、農科大学は発足当時三演習林を有していた。一九一二年（大正元）八月、天塩演習林に隣接する天塩郡幌延村所在の森林二万二七三八町歩を取得し、これをトイカンベツ演習林とした（一九一四年六月、天塩演習林を天塩第一演習林、トイカンベツ演習林を天塩第二演習林と改称）。道内での演習林の取得はこれで終止符を打ち、その後は植民地での演習林設置が始まった。すなわち一九一三年六月樺太に、同年九月朝鮮

表4－5　農科大学の演習林　（1917年11月現在）

名　称	所　在　地	設置年月	面積（町歩）
雨龍演習林	石狩国雨龍郡深川村	1901.3	30,000
天塩第一演習林	天塩国中川郡中川村	1902.1	19,859
天塩第二演習林	同国天塩郡幌延村字トイカンベツ	1912.8	22,739
苫小牧演習林	胆振国勇払郡苫小牧村	1903.11	2,274
樺太演習林	樺太西海岸珍内川流域	1913.6	19,900
朝鮮演習林	朝鮮全羅北道茂朱郡長水	1913.9	25,882
台湾演習林	台湾台中州熊高郡埔里街	1916.8	6,846

備考　朝鮮演習林は朝鮮総督府より80年間の無償貸付を受けたものである。

に、そして一九一六年八月台湾にそれぞれ演習林を設置し、農科大学は七演習林を有するに至ったのである（表4－5参照）。各演習林には助手・書記・嘱託が一、二名配置された。演習林長となり演習林全体の管理に当たったのは宍戸乙熊で、のち小出房吉に代わった。

演習林での学生実習は札幌農学校当時から行われていたが、宿泊施設などが整備し、頻繁にそれがなされるようになったのは農科大学になってからである。実習内容は測量・測樹・造林・森林経理・森林動植物採集などで、苫小牧および天塩第一演習林で主として行われた。

苫小牧演習林では一九〇九年（明治四二）から林業専業労働者の雇用を始めていたが、労働力確保を目的として一九一〇年から雨龍演習林で、一三年から天塩第一演習林で林内殖民が開始された。すなわち、林内の比較的平坦な地を低廉な小作料で一戸当たり五町歩ほど貸し付け、その一方演習林で労働力を必要とする際には適当な賃金で出役すべき義務を課したのである。この林内殖民が演習林経営上に果たした役割は大きく評価されている。

(4)植物園と博物館　植物園・博物館も内容が充実していった。一九一七年（大正六）段階での植物園培養植物は約六〇〇〇種、博物館収蔵標本数は一万三八〇三個となった。これらの植物や標本は研究や教育に使用されるほか、市民の展覧にも供した。同年の参観者は植物園が五万〇一五八人、博物館が二万八三三八人

である。植物園長は宮部金吾、博物館主任は八田三郎が勤めた。

(5)図書館　図書の分類は一九〇〇年（明治三三）九月からデューイの十進分類法が採用された。蔵書は、一九〇七年（明治四〇）十月から一七年十月までの一〇年間に、和漢書が一万五一八一冊から二万五七六九冊に、洋書が一万〇七六三冊から二万七〇六六冊に、図類が九八三枚から二七六八枚へと大幅に増加している。

図書館主任となり図書館の管理に当たったのは、後に北大総長となった高岡熊雄である。そして田中稔（書記）や柴田定吉（雇、のち書記）が実務を担当した。

(6)その他　水産学科の実習・研究施設として、一九〇八年（明治四一）一月忍路臨海実験所が落成し、翌年四月には練習船「忍路丸」（トップスル・スクーナー型、一四六トン）が竣工した。

一九一二年六月「家畜病院規程」を設け、獣医学実験室を家畜病院としても使用し、ここで民間の病畜治療をも行った。

農科大学の財政

一九〇七年度の農科大学歳入経常部予算は一〇万一四九八円であったが、予算は毎年増加し一〇年後の一九一七年度には三・六倍の三六万七二九八円となった。そのうちに占める政府支出金の割合は最も少ない年で四九%、多い年は六四%であり、平均すると五七%となる。つまり農科大学歳入予算の四三%は、農科大学独自の諸収入で賄っていたことになる。諸収入のおよそのうちわけを見ると、授業料・入学料・検定料等収入が二五～三〇%、農場・演習林・植物園収入が五五～六五%、その他が一〇～一五%である。諸収入中で最も大きいのが農場収入で、終始諸収入全体の四〇～四五%を占めている。演習林収入もしだいに増加し、一九一六年度ころから三〇%近くを占めるに至った。歳出経常部予算の内訳は、俸給三七～四六%、校費二三～二八%、傭外国人諸給〇～九%、雑給〇～九%、農場・演習林等経費一五～二八%、その他一～一一%となっている。

資　産　調

証券	動物		船舶		価格合計（円）
価格（円）	数量	価格（円）	数量	価格（円）	
41,050	227	10,354			665,308
67,751	255	12,193	12	15,584	750,932
77,829	258	12,399	12	15,584	929,801
91,674	293	12,065	10	25,152	1,037,845
56,336	290	10,745	12	25,237	1,046,890
35,382	303	13,709	14	25,674	1,097,266

なお、理科大学が設置された一九一一年（明治四四）三月に帝国大学特別会計法が改正され、東北帝国大学は同年度より同法の適用を受けることになった。この法令は一九〇七年三月に、帝国大学の財政を安定させるために制定されたもので、東京および京都帝国大学については政府支出定額金が定められたが、東北・九州両帝国大学はそれが定められなかった。

農科大学に属する資産も毎年増加し、その総額は一九一七年（大正六）で約一一〇万円となっている（表4—6参照）。

第三節　学生たちの生活と活動

学生・生徒の出身地

毎年の農科大学生徒の募集人員は、予科一〇〇人、農学実科・土木工学科・林学科（のち林学実科）各三〇人、水産学科六〇人であった。初年度である一九〇七年度の応募者は六六五名で、平均競争率は三・五倍であるが、予科応募者が最も多く四八五名となっている（この年水産学科生徒は募集しなかった）。受験場は札幌と東京に設けられたが、応募者の大半は東京受験者であり、札幌で試験を受けた者は全体の一割にすぎない。応募者のそうした傾向は、そのまま在学生の傾向として現れた。表4—7は農科大学在学学生・生徒の出身地別を示したものである。土木工学科

表4－6　農　科　大　学

資産 / 調査日	土地 地積（坪）	土地 価格（円）	建物 建坪（坪）	建物 価格（円）	有価 額面（円）
1907.10.31	175,782,632	349,489	5,485	264,415	44,100
1909.10.31	175,778,238	355,442	6,455	299,962	74,098
1911. 5.31	175,778,238	369,312	7,495	454,677	82,469
1913.11. 1	303,666,444	424,258	7,573	484,696	96,859
1915.11. 1	303,244,095	424,047	8,078	530,525	59,556
1917.11. 1	303,264,368	424,077	8,759	598,424	37,102

備考　『東北帝国大学農科大学一覧』より作成。朝鮮・台湾演習林は含まない。

表4－7　農科大学学生・生徒出身地別

		1907.10		1910. 9		1913. 9		1916.10	
大学本科	道内	20	(22)	16	(12)	32	(14)	21	(10)
	道外	68	(75)	107	(82)	197	(85)	181	(89)
	国外	3	(3)	8	(6)	3	(1)	2	(1)
	計	91	(100)	131	(100)	232	(100)	204	(100)
大学予科	道内	25	(13)	42	(13)	32	(11)	41	(14)
	道外	162	(83)	264	(85)	245	(88)	252	(86)
	国外	8	(4)	6	(2)	2	(1)		
	計	195	(100)	312	(100)	279	(100)	293	(100)
農学実科	道内	4	(12)	5	(7)	6	(7)	9	(11)
	道外	29	(85)	66	(90)	79	(92)	72	(89)
	国外	1	(3)	2	(3)	1	(1)		
	計	34	(100)	73	(100)	86	(100)	81	(100)
林学実科	道内	8	(9)	9	(12)	6	(8)	8	(9)
	道外	77	(91)	68	(88)	71	(91)	77	(91)
	国外					1	(1)		
	計	85	(100)	77	(100)	78	(100)	85	(100)
土木工学科	道内	3	(3)	16	(16)	23	(25)	35	(36)
	道外	98	(94)	81	(81)	68	(75)	61	(64)
	国外	3	(3)	3	(3)				
	計	104	(100)	100	(100)	91	(100)	96	(100)
水産学科	道内	11	(19)	12	(9)	6	(5)	1	(1)
	道外	47	(81)	122	(91)	126	(95)	114	(99)
	国外								
	計	58	(100)	134	(100)	132	(100)	115	(100)
合計	道内	71	(13)	100	(12)	105	(12)	115	(13)
	道外	481	(85)	708	(86)	786	(88)	757	(87)
	国外	15	(3)	19	(2)	7	(1)	2	(0)
	計	567	(100)	827	(100)	898	(100)	874	(100)

備考　『東北帝国大学農科大学一覧』より作成。国外出身者は1907年インド3人（本科），韓国1人（予科），1910年インド1人（本科），韓国2人（本科）を除き，すべて清および中華民国出身者である。（ ）内は%

学　生　出　身　地　調

（1917年）

京都帝国大学	九州帝国大学	計
14 (1) [15]	5 (1) [5]	93 (1) [100]
128 (6) [19]	39 (6) [6]	690 (9) [100]
234 (12) [16]	100 (16) [7]	1,498 (19) [100]
363 (18) [24]	111 (17) [7]	1,526 (20) [100]
538 (27) [42]	70 (11) [6]	1,270 (16) [100]
247 (12) [28]	67 (11) [8]	875 (11) [100]
150 (7) [38]	35 (5) [9]	396 (5) [100]
302 (15) [23]	206 (32) [16]	1,299 (17) [100]
6 (0) [27]	3 (0) [14]	22 (0) [100]
22 (1) [29]	1 (0) [1]	77 (1) [100]
2,004 (100) [26]	637 (100) [8]	7,746 (100) [100]

半は中華民国からの留学生である。（　）は各大学における各地方出身者の比率（%）を示し，科・医科・工科・文科・理科・農科大学，京都帝国大学は法科・医科・工科・文科・理科大学，

生徒に道内出身者の増加が見られるが、全体的にみると道内出身者は一二～一三%である。

表4—8に一九一七年（大正六）当時の各大学在学生の出身地の状況を示した。東北帝国大学農科大学を除き、各大学ともその大学の設置された地方の出身者が最も多い。特に九州帝国大学では学生の三二%が九州出身者となっている。

学生の出身地の状況からみる限り、当時の諸大学の中にあって農科大学は地方色の最も希薄な大学であったといえる。その理由として次の二点があげられる。第一は北海道における大学進学者数が、全国的にみるとまだまだ少なかったことである。当時各大学に在学していた道内出身者は、全体の一%にすぎない。第二は数少ない道内の大学進学者の多くが道外に流出したことである。農科大学進学希望者の大半は札幌の農科大学に入学したが、他の分科大学入学希望者は道外へ出ざるを得なかった。そうしたことは分科大学数の少なかった東北や九州においても同様であった。そして全国の学生の六割が、分科大学数が最も多く学

表4—8　各　帝　国　大　学

出身地＼大学	東北帝国大学 農科大学	東北帝国大学 理科・医科大学	東京帝国大学
北海道	21 (10) 〔23〕	8 (3) 〔 9〕	45 (1) 〔48〕
東北	22 (11) 〔 3〕	67 (27) 〔10〕	434 (9) 〔63〕
関東	37 (18) 〔 2〕	41 (17) 〔 3〕	1,086 (23) 〔72〕
中部	64 (31) 〔 4〕	41 (17) 〔 3〕	947 (20) 〔62〕
近畿	23 (11) 〔 2〕	36 (15) 〔 3〕	603 (13) 〔47〕
中国	12 (6) 〔 1〕	15 (6) 〔 2〕	534 (11) 〔61〕
四国	9 (4) 〔 2〕	12 (5) 〔 3〕	190 (4) 〔48〕
九州	16 (8) 〔 1〕	21 (9) 〔 2〕	754 (16) 〔58〕
沖縄		1 (0) 〔 5〕	12 (0) 〔55〕
その他	1 (0) 〔 1〕	4 (2) 〔 5〕	49 (1) 〔64〕
計	205 (100) 〔 3〕	246 (100) 〔 3〕	4,654 (100) 〔60〕

備考　各大学一覧より作成。大学予科生・選科生・実科生・研究生等は含まない。「その他」の大〔 〕は各地方出身者のうちの各大学在学者の比率（%）を示す。当時，東京帝国大学は法九州帝国大学は医科・工科大学より構成されていた。

生収容力の最も大きい東京帝国大学に集中することになったのである。

卒業生の就職状況

一九〇八年（明治四一）から一七年までの一〇年間に、大学本科および付設学科を卒業した者の就職状況を表4—9に示した。本科卒業生に最も多い職種は会社員で、次いで技術官であり、両者で六割近くとなる。学科別にみると農芸化学科と林学科で特にその比重が高く、七割以上となっている。札幌農学校卒業生に多かった職業である教師は、二割以下に減少した。産業の発展に応じた人材需要の拡大が、卒業生の就職状況にこうした変化をもたらしたのだろう。

付設学科卒業生においても、多い職種は技術官と会社員である。中でも土木工学科は六三%、林学実科は五四%と、過半数が技術官となっているのは注目される。

表4—10は卒業生の在住地を示したものである。大学本科卒業生について大まかにその傾向をいうと、四人のうち一人が道内に残り、二人が道外（国外）に、一人が植民地または中国へ赴いた、ということになる。卒業生の道内残

表4－9　大学本科および付設学科卒業生職業別　(1920年3月調)

	大学本科					付設学科			
	農学科	農芸化学科	畜産学科	林学科	計	農学実科	林学実科	土木工学科	水産学科
技術官	58	27	10	24	119(25)	49 (26)	117 (54)	135 (63)	77 (28)
その他の官公吏および官庁嘱託	9		2		11(2)				
学校教職員	54	10	10	8	82(17)	27 (14)	10 (5)		21 (8)
実業	30	8	9	3	50(11)	35 (19)	18 (8)	15 (7)	36 (13)
農会・産業組合職員および農場監督	9		1		10(2)	1 (1)			
会社員(含銀行員)	74	44	14	19	151(32)	48 (26)	52 (24)	40 (19)	103 (37)
その他	20	6	1	2	29(6)	14 (7)	6 (3)	7 (3)	23 (8)
不詳	3		1		4(1)	3 (2)		6 (3)	1 (0)
死亡	12		1		16(3)	10 (5)	13 (6)	11 (5)	18 (6)
計	269	95	49	59	472(100)	187(100)	216(100)	214(100)	279(100)

備考　『北海道帝国大学一覧　自大正八年至大正九年』より作成。対象としたのは1908～17年の卒業生である。( )内は%

表4－10　大学本科および付設学科卒業生在住地別調

		大学本科 (1919年調)	農学実科 (1924年調)	林学実科 (1922年調)	土木工学科 (1928年調)	水産学科 (1918年調)
国内	道内	112 (24)	36 (22)	68 (35)	44 (27)	65 (25)
	道外	223 (49)	84 (51)	94 (48)	102 (61)	138 (53)
	小計	335 (73)	120 (73)	162 (83)	146 (88)	203 (79)
植民地	台湾	40 (9)	21 (13)	3 (2)	4 (2)	8 (3)
	樺太	6 (1)	2 (1)	9 (5)	3 (2)	11 (4)
	朝鮮	18 (4)	5 (3)	16 (8)	11 (7)	11 (4)
	小計	64 (14)	28 (17)	28 (14)	18 (11)	30 (12)
国外	中華民国 (うち満州)	35 (8) (19)	8 (5) (5)	4 (2) (2)	2 (1)	2 (1)
	欧米	16 (3)	5 (3)			19 (7)
	その他	8 (2)	4 (2)	1 (1)		4 (2)
	小計	59 (13)	17 (10)	5 (3)	2 (1)	25 (10)
合計		458(100)	165(100)	195(100)	166(100)	258(100)

備考　『札幌同窓会第41回報告』(1919年),『札幌農学実科同窓会会報』第12号(1924年),『シルバ会々員名簿(附林学会々員名簿)』(1922年),『札幌工学同窓会報』第1号(1928)年,『親潮』第16号(1918年)より作成。対象としたのは1908～17年の卒業生である。人数は判明者。( )内は%

存率は札幌農学校当時と大差ない。台湾や中国への進出は、農学校卒業生において既に始まっていたが、農科大学となりその傾向はさらに促進されたといえる。

一九〇七年（明治四〇）九月の農科大学開校式において、学長佐藤昌介は次のように述べていた。すなわち、「我国内外の形勢を観察するに、国威は八紘に加はり、皇沢遐邇に覃ひ、北樺太の旧領土を復し、南台湾の新版図を広め、満韓の施設又帝国の経綸に待つもの多端なるを以て、人材の需用日に月に加はり、育英の事業又益々急なるものあり」と。そしてさらに、「膨脹的帝国の鴻図を翼賛せしめん」ため、「本学の任務重且大なり」と学生たちに訴えた。同じ時文部大臣牧野伸顕も、「樺太半部は日露戦役の結果帝国の領土に帰したるに就ては、将来同島の経営は専ら本道人士に待たざるべからず。聞く所に依れば同島の利源開発其他一般の事未た充分の調査を経ずと。蓋し是等の調査研究は当大学に於ける適当の任務ならんと信ず」と語った。

つまり、農科大学はその発足当初から、北海道の拓殖のみならず植民地や満州・蒙古の諸調査・経営に寄与することも期待されていたのである。そうした意味でいうならば、卒業生の四分の一近くが植民地や中国へ進出したことは、当局者の意図をかなり満たすものであったといえよう。なお、この時期に台湾・朝鮮・満州に同窓会の支会が設立されている。

付設学科卒業生の在住地の状況も、本科卒業生と似た傾向を示している。調査時点に多少の違いがあり一概にはいえないが、林学実科卒業生に道内在住者がやや多く、農学実科卒業生に台湾への進出者が多いのが目だっている。

学生たちの活動と生活

文武会や開識社あるいはカメラ会・舎密会など、札幌農学校当時に結成された諸団体は農科大学の学生生徒に引き継がれた。そしてさらに水産学科にオコック会、林学科（本科）にシルバ会、畜産学科に畜産学会など、ほとんどの学科や付設学科に親睦や研究を目的とした団体が結成された。また一九

一一年（明治四四）には予科に桜星会（会頭は予科主任渡辺又次郎）が、大学本科には学生会が生まれている。一九一〇年、文武会は『東北帝国大学農科大学』を発行した。これは『札幌農学校』に継ぐ母校紹介の書物で、有島武郎らによって編集されたものである。

文化団体として文武会学芸部のほかに黒百合会があった。一九〇八年に有島武郎・池田嘉吉、それに学生であった原田三夫・小熊捍・藍野祐之らが中心となって結成した美術団体である。同年十月第一回展覧会を清華亭で開き、その後も毎年展覧会を開いている。音楽関係では一九一五年二月に、外国人教師のローランドやコラーを交えて、「グリー倶楽部第一回音楽会」が図書館で開かれている。

スポーツ団体は文武会の下に撃剣部・柔道部・弓術部・庭球部・野球部・スケーチング部・スキー部があった。主な対戦相手は小樽高等商業学校・札幌中学校・北海中学校・北海道師範学校などである。学内での対抗戦もしばしば行われ、教授軍も参加し学生たちと互角の勝負をした。中でも外国人教師ローランドはスポーツが得意で、野球・テニス・スキー・スケートの試合に毎回のように出場し、個人競技では必ず上位に入賞している。

学生生徒の衣服は服制により定められていた。服は黒羅紗地の詰襟背広（学生服）で、本科は交叉した桜花の上に「大」の字を書いた金ボタン、予科・付設学科は桜花形の金ボタンをつけ、左襟に本科は「A」、予科は「P」、農学実科は「農」、林学実科は「F」、土木工学科は「C」、水産学科は「水」の字の襟章をつけた。帽子は本科が角帽で「大」の字の徽章を付し、予科は丸帽に三条の白線を巡らし「星」字の徽章、付設学科は丸帽に「農」「林」「工」「水」の字の徽章をつけた。

学生たちの生活費は一カ月二〇円前後であった（表4—11参照）。そのうち六割が衣食住に費やされている。

農科大学の学生たちに大きな影響を与えた教師の一人に有島武郎がいる。彼は一八九六年（明治二九）学習院中等

科を卒業して札幌農学校に入学、一九〇一年同校を卒業、〇三年に米国へ留学し、ハバフォード・カレッジ、ハーバード大学で歴史・経済などを学び、一九〇七年（明治四〇）四月帰国した。そして同年十二月農科大学講師となり、翌年六月予科教授となった。

有島が担当したのは英語であるが、ほかに学長付主事として生徒の徳育を命ぜられ、週一度倫理講話を行った。彼が一九〇七年二月に発表した講話の予定題目は、「宗教と道徳」「友情」「愛」「ヨーロッパの基礎的二思潮」「教養と抑制」「画家ミレーの生涯」「平凡と非凡」「主義と趣味」「北方の声――トルストイとイプセン」「歴史」「先駆者」「人生探究の範囲」などで、人生・宗教・思想、さらに性の問題にまで話は及んだ。この講話は非常な人気を博し、彼が講話を行った経済学講堂はすべての学科から集まった生徒で満員となり、立ったまま話を聞く者も少なくなかったという。

表4―11　学生生徒1ヵ月の生活費調

（1908年）

	大学本科生	林学科生徒
	円	円
食費	7.41	6.99
住居費	1.76	1.81
薪炭油費	1.41	1.18
被服費	3.16	1.98
学校公費	3.27	3.07
図書・通信費	2.97	1.86
宗教・慈善費	0.16	0.01
健康費	1.02	0.68
休養・娯楽費	1.72	1.47
貯蓄・保険費	0.08	0.23
計	22.96	19.28

備考　『東北帝国大学農科大学』262―264ページ所収

しかし、有島の講話は長く続かなかった。有島の話す内容が自由主義思想を鼓吹するものとして、予科主任溝淵進馬から抗議があったためである。溝淵は「カチカチの国家主義者」で、生徒の先頭に立って兵式体操の授業に参加したという人物である。

有島は米国留学中に社会主義者と親交を結び、欧州経由で帰国する途中にクロポトキンを訪問するなど、社会主義に深い関心を示していた。そして、教師となった後は学生たちが主催していた社会主義研究会に毎週出席し、クロポトキンやラスキン

を講じ、しだいに同会の指導をも行うようになった。後にこの会は有島の自宅で開かれるようになる。しかし、こうした活動のため有島は危険人物視され、警察の監視を受けるようになり、学習院時代に「御学友」であった皇太子が一九一一年八月に来学した際、拝謁を拒絶された。同年社会主義研究会は解散させられている。

このほか有島は一九一五年（大正四）三月に札幌を離れるまで遠友夜学校や文芸活動、あるいは黒百合会などを通じて学生たちと親密に接触し、彼らに深い感化を与えた。有島が去って間もなく「有島先生を敬慕す」との一文が『文武会々報』（第七五号）に掲載されている。なお、当時有島が住んでいた建物は、北二八条東三丁目に移築され、今日北大大学院生用の寮（有島寮）となっている。

恵迪寮　農科大学となると同時に従来の舎則は改正されたが、自治制は学生監部の監督下に維持された。恵迪寮には大学本科学生と予科生を原則として入舎させたが、しだいに本科生は減少し、一九一七年（大正六）ころには寮生の九割以上を予科生が占めるに至った。

一九〇五年（明治三八）の新寄宿舎の開舎後、若手教師が寄宿舎係として舎内に住居し、学生たちの指導や相談にあずかっていた。初代寄宿舎係は半沢洵で、森本厚吉（一九〇六年）、有島武郎（〇八年）、高松正信（〇八年）、田中義麿（〇九年）、吉田新七郎（一〇年）へと引き継がれたが、吉田が一九一一年十月に恵迪寮を去ったのを最後に、この制度は廃止された。

食事は入札によって決まった賄人まかせで、栄養価など考慮しないものであった。そのため寮生の間で脚気が流行ったこともある。一九〇八年六月に自炊制度を実施し、寮生による食事の自主管理が始まった。最も有名な恵迪寮歌「都ぞ弥生」が生まれたのは、一九一二年（明治四五）である。この年寮内誌『辛夷（こぶし）』が創刊され（一九一四年廃刊）、文学団体「凍影社」が結成された（一九一四年解散）。

舎則に定められた恵迪寮生の夏期（五月～八月）の一日の生活は、午前五時半起床、六時半朝食、午後〇時半昼食、五時半夕食、十一時就寝で、入浴時間は四時から七時半まで、外出は午後十時までとなっている。しかし実際にはそうした規則は有名無実で、「朝は寝放題、夜は起き放題」、玄関が閉まってから帰寮した者は「塀も門もないから、窓からいくらでも入ることができた」と、当時の一学生は回想している。

札幌の自然と農科大学の一年

北大百年の歴史の中で東北帝国大学農科大学時代は、組織の大変革や大きな事件もなく、比較的平穏な一時期であった。全国各地から札幌にやって来た学生たちは豊かな北海道の自然に囲まれ伸び伸びと生活した。次に掲げる一文はそうした平和な空気の中での、農科大学の一年の生活を伝えるものである。

九月の初旬、札幌に帰つて来た僕等の眼に先づ映るものは停車場通りの柔い緑である。札幌！如何に懐しい処であらう。藻岩山の麓豊平川の岸辺に横はる札幌！其輪廓の正しい、囚はれた所の無い札幌を僕等は好むのである。木立の眺め多く、広々した道路にはタンポヽの花が咲く。最初来た時には荒涼と寂寞とがあつた。親しい所は何処にも見出されなかつた。低い陰鬱な家並が北海道といふ感じを一層深くした。唯その静けさが僕等の心と合した。一度野辺に立つた時、際涯の無い石狩平野を見渡した時、将た又牧場のエルムの木の間に新しい空気を呼吸した時、凡ての小さな反抗心は失はれた。かくて札幌と僕等とが全くの他人でなくなつたのである。

今、札幌に帰つて来ると、林檎は僕等を迎へんが為めに熟して居る。

九月十一日から新学年が始まる。新しい勇気を持つて僕等は集つて来た。

秋の初の空高う澄んで、木の葉は未だ盛である。肌に触るゝ空気の快さ。クローヴァー生ふる小径を通つて、博物館の庭を訪れると、エルムの高い枝の間にキビタキ、オホルリ、クロツゴメなどが飛んで居る。

農場の裏へ行くと、水は緩く音なく林を廻つて流れ、水際の蘆荻が徒らに長い。驢馬の仔が人懐しげに木柵の間から首を出

す。アカシアの並木道に出ると、西に塁の如く立ち連なる山々、汽車がその麓を駛つて小さく消え行く。夕方には手稲山の上に火の如き雲が燃えて、遠き空に反映するのである。

エルムの葉洩りに降る細い雨が、斜に射す日光を受けて銀の如く輝くこともある。

既にして十月、新入生諸君の歓迎の意味から、文武会の遠足会が催される。その頃になると、山も林も野辺も漸く色づき初めて、エルムに纏ふツタウルシが真紅に、モミヂ、ヤマウルシ、ムシカリ、ヌルデ、タラノキ、ヤマブダウ、アヅキナシがとりどりに濃く染まる。透き通る秋の日に遠近の黄ばんだカツラの梢も照り栄ゆる。修学旅行のあるのも亦この季節だ。

雪来る前の畑も忙しい。甘藍の収穫をした後は、馬に曳かせてプラウをも進めなければならぬ。

日曜に晴天を得れば、紅葉を探るべく、藻岩の奥や発寒の川上に志す。北海道には短い秋だ。紅葉狩の還様、行手に遠き柿の果に秋の趣を味ふことは出来なくても、メイゲツカヘデの木の下は夕栄雲の影の如く華である。若し夫れ紅葉の上に霰たばしるが如きは、北海道でなければ眺められぬことであらう。

林檎は既に籠に収められた。霜は夙に雪の先駆として来て居るのである。広い大学の庭はエルムの落葉を以て敷かれて了つた。灰色雲のゆきかひ騒がしく、夕暮林を罩むる霧、薄月の光——手稲の頂が白くなつてから五日、六日、七日、未だ十月末といふに雪は札幌に。

忽ち世界が変つた。急に新しい処に来たやうに感じられる。

彼方の森に薄く雪が積つて、弱い日光に輝いた様は、差し交す小枝の一條一條も明に、丁度ステリオスコープで覗いて居るやうである。

青草が遂に全く隠されて了つた。よきみのりを与へた今年の土も全く埋められた。橇が動くやうになつた。鴉の黒いのが眼に入るやうになつた。寄宿舎の軒に長い氷柱が並ぶやうになつた。かくて日は薄暗い十二月に辷り込む。

夜、勉強を終つた時など、立つて窓掛をかゝげて北の方を望むと、暗い平野には一物の横はるなく、唯地平線に近く北斗七星の傾くのを見るのみである。

第一学期の試験が一週間続いて、その終る十二月下旬には氷滑りが既に始まつて居る。凡そ冬の最も楽しい遊びはこれであら

う。月の夜など、氷破る微な響を森蔭に伝へつゝ滑る時の面白さよ。この外には山の雪辷りがある。塵なき郊外の雪の風景を探ることも出来る。

豊平川の凍る水音を隔てゝ、褐色の落葉松連なる平原の沈黙に対する時、高く峻しい恵庭山が人の世を見守つて居る。

新年に入つてから冬は益々酷しい。刃を含む風。物を凍らす力。密柑が凍つた。インキが凍つた。昨夜は零下十何度に下つた。未だ未だそれのみでない。吹雪の襲来！

狂う北風と捲く雪と。唯一面の灰色！

僕等は堅く用意をして、荒海の中を泳ぐが如く前に進むのである。かのエルムも潮に揉まるゝヒジキのやう。

吹雪の後の爽さ。雪の面は波を描いて、如何に強く嵐の過ぎ行いたかを示して居る。

僕等の血管は如何なる時にも凍らない。南から来る花の便りが梅の既に綻びたことを告げても、僕等は羨しいとは思はない。

試験管の中の世界を尋ね、顕微鏡の奥の春を追ひ求むるに忙しいからである。木の芽は未だ堅くして容易に破れさうにないが木の皮一枚の下には春の脈の流れて居ることを知つて居るからである。戦の日は長く続かない。三月に入ると一日は一日より暖く、雪はやゝやゝに弛み初める。春の如く晴れた大空は少し騰つた水蒸気に仄に霞んで、強い南風が枝を鳴らす。野末に連なる雑木林にも春の力は躍つて居る。

三月末から四月初にかけての春休みは雪が融けて道の悪い頃である。薄黒く汚れて意気地なく融け流るゝ雪よ。僕等はこの雪と戦つて最も勇敢に五箇月を過ごした。

暖い日の光。軒端より落つる雪融けの水。白濛々と立ち騰る水蒸気の中から蒸せ返るやうな土の香を嗅ぐと、力の身体に加はることを感ぜずには居られない。馬も高く嘶いて居るではないか。

今は雪の叢消えを林の中などに眺めるのみとなった。懐しい黒土は果から果に亘って現れた。土より出でた人間が土を耕すべき時が来た。

萠え出た浅緑の若草は一雨毎に色を増す。森も衣を織り出した。エルムも芽込んで来た。藻岩山の裾には先づフクジュサウが黄な花を附けた。アヅマイチゲが白く咲いた。ミヅバセヲは低い湿つた所に生えた。大学の構の中はキバナノアマナ、エゾノ

エンゴサク、タンポヽで飾られた。

僕等は春の歌を歌い乍ら、採集鞄を肩にして、豊な野面を望んで出掛けるのである。やがて五月の春！待ち待った五月の春！時計の針も動くを惜しむかのやう。淀む様な愛さに山桜の花が開いた。少し遅れて梅が蕾を破つた。コブシ、ミヤマザクラ、エンレイサウ、エゾノタチツボスミレ、スミレサイシン、ヒトリシヅカ、ニリンサウ、ミヤマキケマン、コンロンサウ、ヒメイチゲ、ルキエフボタン、ヤマシヤクヤク、シラネアフヒ、ナンブサウ、モイハナズナ、ヤマハナサウ、クロユリ、万の花一時に咲き競ふ北海道の五月の春！

文武会の遊戯会が五月第二の土曜日、大学の運動場で開かれる。札幌の主なる年中行事の一つで、その準備には僕等学生が任ずる。

蒸すやうな草のいきれの中からツリアブの歌も聞こえて、ヒメシロテフ、コシヾミ、エゾアカネ、エゾハルセミが飛び出すやうになると早や六月だ。涼しいイタヤカヘデの木蔭が先づ初夏らしい感じを与へる。カツラ、ハンノキ、ブナ、オホナラ、ホヽノキ、カラマツの若きよそほひに僕等の心はときめく。遠き野末——新緑の薫りする方が慕はしくなる。

六月の末に学年試験、七月の初に卒業式があつてこゝに僕等は一年の学生々活を終るのである。同時に僕等の前に夏の北海道の開けることを忘れてはならぬ。夏の北海道は僕等の足を踏み入るゝに任されてある。新しい研究を試みるにも、高き経験を得るにも、六千方里の陸は決して狭くない。僕等が各がじゝ北海道の奥深く分け入るのは、社会から退くのではなく却つて肉迫するのである。方面は一人一人に違つてもその目的は一つである。僕等の赴くべき所は多い。或は石狩川の流域、或は蝦夷富士の裾野、或は新冠の御料牧場、或は十勝、或は北見、或は根室から千島へ、或は又礼文から樺太へ。

原始的風物。人工の入らぬ天然。それは今も尚北海道に於て接することの出来るものである。昔は慓悍にして遅鈍なアイヌと熊との領分であつた。そのアイヌは余り見られなくなつた。熊も山の峡間に隠れた。日本語を語る人民がブラッキストン線を越えて来て、ほしいまゝに振舞ふやうになつた。斧と火との勢力は如何なる僻隅をも残して置かない。天然と人との混乱！北海道は革命の時にある。而もなほ、鮭や鱒の群れて行く川の上流や、櫛白樺の大森林など、太古其儘の面影を眺めることは難しくない。

今や夏。暑さの中に空虚がある。葉がくれに啼く郭公が旅の情を誘ふが儘に僕等は行くのである。洞爺湖の岸を通るならば、濃い藍色の水の上に藻草が浮いて居るであらう。噴火湾の水は鉛の如く濁つて、薄い夕日の光を溶かして居るであらう。汽車に乗つて石狩川の辺を駛るならば、黒い焼け残りの木の株が熊の如く立つて居るであらう。石狩、天塩の国境を過ぎる時は、泥炭地の上に雨雲が迷つて居るであらう。オコツク海を渡るならば、寒流を伝つて来る風が陸に衝突して霧となるであらう。野寒岬に佇むならば、利尻富士に湧く雲が日光を射返す方、遙に樺太が波の間に姿を現して居るであらう。而してこゝから南にかけて、北海道といふ大きな島が末遠く広がつて居ることを切に感ずるであらう。

二箇月余りの暑中休暇は、僕等をして自由なる活動をなさしむべく十分であるのだ。

既にして再び九月初ともなれば、僕等は勇みをなして札幌へ帰り行くのだ。藻岩の山の麓、豊平の川の岸辺に横はる札幌へ。

新しい都へ。一年の半は緑に囲まれ、半は白に包まるゝ美しい都札幌へ。

（東北帝国大学農科大学文武会学芸部編『東北帝国大学農科大学』、一九一〇年、二四二―二五〇ページ）